AACK 京都大学学士山岳会 No.17

Newsletter

JULY 2000

http://www.aack.or.jp

目次

紀行
「西大巓（にしだいてん）」登山記 「上」
―森本陸世君不慮の死前後―
本多 勝一……1
山岳研究
教育的登山論シリーズ 序論
中島 道郎……3
随想
富士村山浅間神社を訪ねる
新井 浩……4
記録
妙高山外輪山スキー事故顛末記
平井 一正……4
梅里雪山報告
明永氷河における
収容作業について……7
お知らせ
映像資料の調査のお願い
平井 一正……8
会長より
上尾庄一郎……8
AACKへの電話連絡……9
転居……9
www.aack.or.jpより
上石見の大倉山に登りました
デルファー高村……9
理事会決議録……9
総会決議録……10
追悼 林一彦
お別れの言葉
斉藤 惇生……10
関係団体行事カレンダー……12
編集記……12

「西大巓（にしだいてん）」登山記 「上」
―森本陸世君不慮の死前後―

本多 勝一

二月十九日の土曜日。福島県郡山市での講演会に出なければならなかったので、そのあと磐越西線で猪苗代駅にゆき、タクシーで裏磐梯高原（北塩原村蛇平）の民宿「豆わらじ」に着いたのは夜の七時ごろだった。他の四人は昼食前に着いて、ここのスキー場で何回か滑ったあと、風呂にはいってひと眠りし、私が着いたときは起きたばかり、すぐにみんなで夕食のテーブルについた。

私たち五人は、AACK関東会の中でも山スキーにかなり熱中しているほうといえるだろう。沖津文雄、伊藤寿男、清水節郎、森本陸世、そして〝最長老〟の私である。今年は近年になく雪が多いので、これから五月にかけて山スキー党にはこたえられぬ喜びの季節、まずは小手しらべにと選んだのが吾妻連峰であった。スキー場のリフトを利用してから西大巓（一九八一メートル）に登り、条件がよければさらに西吾妻（二〇三五メートル）まで足をのばす計画だ。

残念ながら、翌日の天気は最悪に近い予報である。大雪になりそう。こういう場合、当日は沈殿してでも天候回復を待つのが私のやり方だが、サラリーマンや会社役員ではそうもいかないのが日本らしい。かといって山スキーの単独行は避けたいので、順延可能な仲間が一行に一人でもいることが、計画実行のためには必要だ。このことは以前から思っていながら、つい「仲間」の楽しさに引きずられて忘れてしまうことがある。実はこのあと三月十九・二十日の連休に、北海道（朝日新聞社）時代の仲間たちが巻機山へ行くというので私も加わったが、当日は大雪で登頂できない上に順延可能な人がいなかったため、空しく引揚げざるをえなかった。今後はキモに銘じての条件にしよう。なにしろ人生も残り少ないのだ。今回は沖津君が順延可能なので加わった次第である。ただし、予報がはずれることも珍しくないから、あくまで当日になっての話だ。

民宿といっても、かなり立派なペンションといえるこの「カントリーハウス 豆わらじ」は、食事内容も大いに満足できる。夕食は牛肉のタタキと鶏肉団子鍋を中心にグラタンとナメコのおろしあえ。デザートにシホンケーキとアイスクリーム。酒

は宿のブドウ酒を半量（ハーフ）びん分のデキャンタで三本飲んだ。私たちの主たる話題はAACKの今後である。森本君は関東を代表するようなかたちの副会長でもあり、皆の考えを熱心に聞いていた。

夕食のあと、食堂から伊藤・清水の「花豆」部屋に移って軽く二次会をやった。五人で三部屋使っていて、あと二つは沖津・森本の組（「うぐいす豆」部屋）と私一人の「小豆」部屋である。ここでは私が持参したブドウ酒をあけて、それぞれのコップに注いだ。しかし明朝は早起きしなければならないので、九時ころにはお開きにして各部屋へ引き上げた。

この席で森本君が自分のコップのブドウ酒を飲まずに清水君に渡したことを、沖津君は気にして覚えている。日ごろの森本君にしては珍しいからだが、それも「一週間ほど前にカゼをひいて、まだ少し残っている」と聞いていたから、それほど気にするわけもなかったという。私以外の四人は伊藤君の車で来たのだが、森本君は車内で「花粉症がある」とも言っていたそうだ。

二月二十日（日曜）。朝食は六時半。ご飯とトウフの味噌汁のほか、納豆・ホウレンソウ・ヒジキ・だし巻き卵、デザートにグレープフルーツ。このペンションを私たちが選んだのは、北塩原村裏磐梯観光協会の紹介による全くの偶然である。ペンション経営者・池田裕氏は、大阪で保育社に勤めていたが、いわば脱サラで奥さんとともにここへ来たという。しかしもともと池田夫妻は、都会を離れてこうした生活をしたかったので、それが実現したかたちだ。保育社といえば、私も植物図鑑や甲虫図鑑など十数冊買っているので、なんだか因縁浅からぬような気がした。それに池田氏の父君は立命館大学で中国政治史を専門とする学者として知られた池田誠教授で、奈良女子大の学生だった沖津夫人もその出張講義をきいたことがあるのだ。

朝めしの席では、まずケーブルテレビをめぐる近い将来の情況が話題になった。この話題は森本君が主としてリードした。いまNHKがBS放送などやっているが、そのための横長テレビが売れないのは、受信機があってもソフトをつくる放送局側でべらぼうに金がかかるため、放送しきれないことによるという。それにBSはまもなくデジタルにとって代られるが、それも十年後くらいにはNTTのケーブルテレビに席を奪われるだろうと。

食堂のテレビが、八方尾根でのニュージーランド人の遭難を伝えた。四人組がコース外に滑りこんで、なだれを起こして三人死亡。ニュージーランド人たちは、日本の豪雪の凄さを知らなかったのではなかろうか。なだれの規模の長さ・幅・厚さを聞いて、これは捜すのも大変だと、私たちの話題は八方尾根に移った。現役山岳部時代の正月、曽根原憙夫君と私が不帰の嶮をめざし、唐松岳の稜線ちかくで吹雪にとじこめられて五日間の雪洞ぐらしをしたこと（注）、雪洞といえば森本君が鹿島槍でビバークしたときもそうだったとか。

朝食は五人とも普通にたいらげて、その点ではだれも異常はなかった。ただ森本君は少しだけ頭痛がすると言い、それも「頭をこう下げると痛む」と前こごみにやってみせた。カゼがまだ直りきっていないようだというので、池田氏が「プレコール」というカゼ薬を出してくれた。沖津君が「今日は天気も悪そうだし、休んで寝ていた方がいいんじゃないか」と森本君に言い、森本君も「山はやめておく」と答えて、調子がよければゲレンデに出るかもしれないことを示唆した。

わずかに粉雪が舞っているていどの曇り空だが、とにかくリフトの終点まで行って様子を見ようと、私たちは伊藤君の車で七時四十五分ごろ宿を出た。森本君が玄関口まで出て見送ってくれた。天気が悪いから「たぶん早くもどると思うよ」と私が言った。これが森本君（五十一歳）とかわした最後の言葉になろうとは、だれが、どうして想像できようか。

スキー場はすぐ近くだから、八時前に着いて、ゴンドラには八時二十五分ごろ乗った。さらにリフトに乗りついで、終点での情況は「曇りときどき青空の隙間がのぞくていど」である。ともかく登ってみようと衆議一決、まずは西大巓をめざすことにした。

（以下次号）

〈注〉このときの詳細は本多勝一著『旅立ちの記』（朝日新聞社）の二十九章に描かれている。

教育的登山論シリーズ

中島　道郎

序論

わがAACK の会員諸兄は、我が国の登山界にあってはいづれも指導的立場にある人々だと思います。ところが、人に教えようにも、世の中の変化に連れて、昔の知識はもう古いんぢゃないか、とか、この頃の知識はどうなっているんだろう、と心配する向きもおありかと案じ、ここで新旧の知識を整理し、確固たる指導原理を再構築して頂きたいと思って、このニュースレターにシリーズで載せて頂くことにしました。

そんなもん、言われんでも知っとるわい、という内容ばかりです。あくまでこれは、諸兄の知識の足しに、というのではなく、諸兄が人に教えるときの参考に、というシリーズであることにご留意頂きたいと思います。

実は、これらはこれまで別の所に書いたものです。しかし、それはAACK 会員諸兄に読んで貰えない、あるいは貰えるかどうか分からないところに載せたものなので、折角書いてもあまり世の役にたっていないのではと思っていました。それで、改めてここに取り上げて頂けることなって、とても名誉に思います。この内容に対して、実践家としての立場から、諸兄のご意見・ご注文を聞かせて頂けると大変有り難いと念じています。

シリーズは大体以下のような順序で進めてゆく方針です。

一．安全登山十則
二．登山必携十品
三．登山べからず十訓
四．登山の服装
五．老年登山について
六．中高年登山の健康余得

一．安全登山十則

（UIAA医療委員会公認基準・その四、一九九四年より）

中島道郎

わがAACKは独立した登山団体であるが、登山団体の全国的組織論からいうと、京都岳連に属し、その上に日山協があることになっている。世界各国の日山協的組織が集まった国際組織を国際山岳連盟(UIAA)と呼び、その中に種々のcommitteeがある。その一つにmedical committee(UIAA MEDCOM、医療委員会)があり、筆者はその委員の一人である。その委員会の活動の一つとして、いろんな基準を制定しようとした時代があった。筆者はそれが制定されるたびに翻訳してJACの『山』に紹介してきたので、ご存じの方もあるかもしれない。ここにご紹介するのはその一つで、山に楽しく安全に登るための心がけを十ヶ条にまとめたものである。

（一）自分の技倆と体調に合った山を選んで登る。熱がある時は、その原因に関係なく、登山は取り止める。

（二）食糧は、主に糖質に重点を置いて計画する。（ビスケット、チョコレート等）

（三）水分は出来るだけ頻回に、大量に摂る。ただしアルコール飲料は不可。アルコールは運動能力と慎重さを低下させる。だから、行動中はこれを飲んではいけない。

（四）ウオーミングアップはゆっくりと。だから最初の三十分間はゆっくり歩き始めること。

（五）出来る限り一時間ごとに休憩を取り、食べたり飲んだりすること。空腹・口渇時は言うに及ばず、そうでなくても『少し食べてたっぷり飲む』のが疲労防止のコツ。

（六）疲労や困憊の様子が見られたら、大休止をとるか、誰かに付添われての下山を考える。休憩中はブドウ糖ばかりでなく、澱粉などの複合糖質を摂るように。困憊の徴候が明らかな場合は、それは同時に低体温（凍死寸前状態）および／もしくは高山病の可能性もあることを想起すること。

（七）小児、高齢者、何らかの慢性病の保持者といえども、それに必要な準備さえ怠りなければ登山して差し支えない。心配なら、かかりつけの先生に相談すること。

（八）海抜二五〇〇メートル～三〇〇〇メートル以上では、当夜の宿泊地と前夜の宿泊地の間の高度差が三〇〇メートル以上にならないように計画する。出来れば、その日の最高到達地点には泊まらないで、そこより低い地点へ下がって泊まる方がよい。

（九）どんなに小さなルックザックでも、

以下の物品は必要最小限の装備として常備のこと。サングラス、手袋、帽子、ツエルト、予備衣服、蝋燭とマッチ、懐中電灯、救急医療セット（訳者註：それに非常食一食分。それらはすべてビニール袋にまとめる。）

（十）その山の登山路や気象状況に関する情報は、地元の人によく聞いて、出来るだけ沢山集めること。登山届けが必要な山には提出すること。

（二〇〇〇．六．受理）

富士村山浅間神社を訪ねる

新井　浩

今回の富士須山道から宝永山を登る際、どうしても行きたかったところは、村山浅間神社であった。それは高校時代の先生の訳本が原因しているのである。

先生の名は山口光朔、のちに神戸女学院大学学長となる。訳された本は岩波文庫にあるので、あるいは既にご承知の方があるに相違あるまい。「大君の都」（幕末日本滞在記）上、中、下　オールコック著である。この英国公使が、外国人として初めて富士山に登っているのである。

三年間の滞在中の日本観察記録で、幕末のことが先進国人の目で、とてもリアルに捉えられており、挿絵と共に興味がつきない。富士登山は、「第二十章　富士山への巡礼と熱海温泉訪問」に述べられている。私は学生時代に冬富士を二度登っているので、この章から読みはじめたことを告白しておこう。

地図を手許に置き、彼らのトレースを追う。幕府の妨害にも拘らず、外交特権を行使して、やっと出発出来たのは、万延元年、一八六〇年九月四日であった。一行は八名（夫人と犬一匹を含む）なるも、荷馬の列は果てしなく続いたとある。東海道を戸塚、藤沢、小田原、箱根と進む。箱根についてはスイスのベルンアルプスと対比している。「その景色は、崇高さの点でアルプスにとても及ばぬとしても、その代わりに植物の種類の豊富さではるかにアルプスをしのいでいる。」

三島、吉原と泊まりを重ねる。吉原で東海道に別れを告げ、富士に向かって、大宮と森山の二つの小村を通るルートを選ぶことになる。そして大宮の手前の僧院に泊まる。

さて問題は森山である。わざわざモリヤマとカナを振っている。しかし地図には存在しない。探しているうちに、村山ではないかと気がついた。それは本の中に、東海道トーカドウ、大宮オミオ、箱根ハコニ、という具合に、今と違う発音だったことである。村山のことをモリヤマと発音し、訳者は、うっかりと森山と漢字をあてがったものと推察されるのである。

今回、村山浅間神社を訪ね、この推理は正解であったと判る。境内の一角に木碑が立てられ、「外国人最初の富士登山者、ラザフォード・オールコック卿を讃えて　市制五十周年記念植樹」とあった。無人の神社の為、詳細は不明であるが、私にはこれで十分であった。なお、ここの大スギと大イチョウは天然記念物となっていた。

オールコックの富士登山に戻る。最後の人の住む村である村山を通り、森林の道に入る。「森林は麓をぐるりと取り囲み、山腹まで高くはいあがって、聳え立つ高峰の両肩をまるでライオンのもじゃもじゃのたてがみのように覆い、威厳を増大させていた。」

途中の石室で一泊。翌日登頂。計八時間かかっている。外国人女性ならびにワン公の初登頂でもあった。山上でゆうゆうと二泊している。科学的計測、植物採集などを行っている。帰りにキリと雨にやられる。三週間後に江戸に帰り着いたが、富士を眺めると、頂上は雪で覆われていた。季節的に最後の機会をうまく捉まえたのであった。

（新井　浩記す）

妙高山外輪山スキー事故顛末記

平井一正

恥ずかしいことであるが、私は昨年暮れに三田原山でスキー滑走中、転倒骨折し、同行者はもちろん多くの人に迷惑をかけた。事故の原因を検討し、今後の参考にしてほしいと思い恥を忍んで報告する。

日時　一九九九年一二月三一日
　　午後一時頃、天候　晴
場所　妙高山外輪三田原山東方ピーク南斜面
パーティ　高尾文雄、芝田之克、平井一正
（芝田は高尾の友人）

一、三田原山

笹谷山荘出発八時四五分、第二高速リフトから第三高速リフトを乗り継いでリフト終点九時三〇分。気温は低く快晴、ラッセルはほとんどない。斜面を登るにしたがって雪はブレーカブルクラストいわゆるモナカ状になってきた。外輪上に到着し、食事をする。高尾の携帯電話で笹谷山荘に連絡がとれる。風が冷たいが白馬連山、鹿島槍など一望できる。滑り出し一二時半。登りのときから心配していたように雪質は悪く、慎重に滑る。高尾、芝田は、あたかも砕氷船のようにクラストした雪を砕きながら、ジャンプターンをくりかえして滑降する。それを見たときにとうてい一緒には滑走できないと悟り、私は私で斜滑降、キックターンでおりようと思った。この雪では私の得意なストック制動でとばすことはできない。あっという間に二人ははるか下で私を待っている。ときどきはストックボーゲンを交えるが、スキーがひっかかってよく転倒する。焦るなと心に言い聞かせながらそれでもなんとか高度を下げる。

二、転倒骨折

彼らの技術にはついていけず、心の中で焦りは隠せなかった。昨夜ストック制動の効果について議論した伏線もあり、また途中で誰かが言った「そんなおり方では面白くないでしょう」という一言もこたえた。そういう状況の中、午後一時、ちょうど待っていた彼らの面前でボーゲンを試みたとき、転倒した。このときストックは使ってなかったと思うが、確かでない。右足（外足）は左側に回転したが、左足（内足）は雪に深く突っ込み、回転できずねじれる形になった。それを見ていた高尾によると、内足に体重がかかっていたというがそうかもしれない。そして前向きに転倒した。このときセーフティがきいて靴とスキーがはずれたら事なきを得たのだが、靴はリリースせず、ポキポキという不吉な音とともに激痛が走った。右足はリリースして無事であった。

瞬間、骨が折れた、えらいことになったという衝撃で気が動転した。五メートルほど下にいた二人に骨が折れたと告げた。二人は信じられないという顔で一本足で滑降できないかときくが、足は一センチも動かない。ようやく二人は事の重大さを悟ったようで、階段登りでようやく私の横に来てくれた。

高尾は私に山岳保険に入っているかを確認し、ヘリをよんでもいいかときく。そのときの気持ちはいくら金がかかろうと呼んでほしかった。というのは左足は少しでも動かすと激痛が走り、ソリや背負ってという手段では無理ということがわかったからである。この地点は二一〇〇メートルで、林道まではまだ八〇〇メートル近くある。ここからでは携帯電話は通じないので、高尾は電話が通じるところまで移動して笹谷山荘と連絡をつけ、そこから新潟県警にヘリを要請した。ヘリの手配に時間がかかるので三時間はまってほしいとのことであった（県警のヘリは普通は新潟空港に待機しているそうである）。幸い転倒した場所は切り開きのブッシュのないところで、そのままで待つ。

三、救出

芝田が付き添ってくれ、スキー靴のインナーだけにしてくれた。これで痛みは少しましになったが、しかし足をおさえていないと足が動いて激痛が走る。芝田に小枝を折ってもらって、副木としシールで足にまくがあまり役に立たない。高尾が移動した方向から登山者がふたり登ってきた。「連絡がとれてヘリが来る、安心してください」と言う。そして我々の横にザックをおくと、雪面にHという文字をラッセルしてつけた。それから着ているヤッケをぬいで着せてくれた。山は相身互いですからと、自分たちの行程がおくれることを気にしているそぶりも見せなかった。私は久しぶりにたのもしい山男に会った感じであった。

高尾がもどってきて、二〇分毎に交信があると言って再び交信地点に戻っていった。二人の登山者はヘリがくるまで付き添ってくれると言う。そしてコーヒーをわかしてくれ、今度は羽毛服を貸してくれた。高尾からセー

タを借り、その上に羽毛服を着たので暖かかった。ガタガタと震えがくると聞いていたが、そんなことはなかった。恥ずかしいことに私はスコップも羽毛服も持っていなかった。

やがて日が傾いてきて、笹ヶ峰のあたりに雲がわいてきた。早くヘリが来ないとガスが取り巻く。そうなったら救出は無理である。内心心配になってきたがどうすることもできない。やっと四時すぎ、ヘリ特有のプロペラ音が聞こえてきた。あとの三人は立ち上がり、手を振って合図する。ヘリはまず頭上を旋回し、現場を確認したあと今度は高度をさげて頭上でホバリングして停止し、一人の救助隊員がワイヤでおりてきた。巻き上げられる雪と風に目をあけていられない。二人の登山者も手伝ってくれて手際よく私を担架にのせ、しっかりと固定してくれた。お礼もそこそこに私は空中に浮かんだ。ヘリのフロートに担架がひっかからないように、空中に乗り出してうまくワイヤを操作している隊員を仰ぎ見ながら、私は無性に自分に腹が立ち、情けなかった。自分の五〇年にわたる山歴の中でも、事故で人に迷惑をかけたことはなかった。二三年前の冬、京大笹ヶ峰ヒュッテで捻挫（あとで骨折と判明）したときも自力で下まで滑っておりた。今回の事故の原因は自分の不注意、未熟さ以外の何者でもなく、それはまた山に対する緊張感の欠如につながる。そのために高尾、芝田のスキーの楽しみを奪い、またふたりの登山者には行程を狂わしてしまった。自責の念でいっぱいで、涙がでそうであった。やがて私はヘリの中にうまく収まった。芝田が付き添いで同行してくれるために、私のあとからワイヤで上がってきた。ヘリは六人乗りの大型であって、隊員の方々はきびきびと動いておられて本当に頼もしく見えた。

一方ひとり残った高尾は迫りくる夜に焦りながら、二人のスキーはその場にデポし、慎重に滑り無事に笹谷山荘にかえりついた。

四、病院から自宅まで

ヘリに乗せられたが私は担架にしばりつけられているので天井と山の斜面しか見えない。やがて新井のヘリポートにつき、待機していた救急車に乗せられて、名前、住所や事故の状況などを聞かれた。事情聴取がすむと、救急車はサイレンをならしながら、上越（直江津）の新潟労災病院まで送ってくれた。ただちにX線をとるわけであるが、インナーシューズが足にぴったりでぬげない。いろいろと試みたが激痛にはたえられず、靴を少しはさみで切ってもらって、やっとぬがせてもらった。

左足は手ぬぐいをねじるように脛骨が三カ所、腓骨が一カ所、合計四カ所折れていた。ギブスを踵から股の付け根まで巻いてもらったら、ふしぎにそれまでの痛みがウソのようにおさまった。

私はここで入院と考えていたが、それはだめ、宿に帰りなさいと言われた。そのときこれからの自分の行動をどうするかという問題に直面した。宿といっても笹谷山荘は山の中で無理。近くのホテル、寝台車、タクシなどが頭に浮かんだが、丸太棒の足で電車にのれるか、陸橋はどうするか、と考えていると、だんだんとこれ以上人に迷惑をかけたくないという気持ちが強くなってきた。芝田にタクシ会社に電話をかけてもらって京都まで行ってくれることを確認し、さらに自宅に電話してお金の有無を確認した。幸い二千年問題で家にそこそこはあった。ただどのくらいかかるか、タクシの運転手にきいても七、八万円くらいといい、私もそれくらいならという気持ちもあった。また山岳保険で払ってもらえるかなという甘い期待感もあった。支払いをすませて六時病院を出発する。

高速道路は大晦日ということもあり、空いており五時間半くらいで家に着いた。しかし高速代が九千円とメータが一三万円、合計一四万円かかった。また山岳保険では支払いができないということがあとでわかった。でも当時は気分的に落ち込んでおり、少々の出費はどうでもいいというような感じであった。

五、事故の原因

（一）技術的精神的未熟　私は一九三一年生まれ（六八歳）で、山スキーは五〇年の経歴があり、最近も毎年のように山スキーをしていて、山スキーにはかなり自信はあった。しかし加齢による体力不足と、悪雪に対する技術的未熟、それに二〇歳以上年下の若者と競合する気持ちで行動した軽率さ、などが原因の一つである。このような状況では雪質が

よくなるまで、あくまでも斜滑降、キックターンでおりるべきであった。

（二）モナカ状の雪質　たしかに当日の雪質は悪かった。しかしこのような雪は今回が初めてではない。やはり段違いの技術をもつ二人を待たせてはという心の焦りから、いつもの慎重さを失った。同程度の技術をもっている人と同じなら、こうはならなかったと思う。

（三）セーフティがリリースしなかったこと。　私のスキービンディングはチロリアンである。一三年前くらい前に購入した。無知なことと怠惰のために以後一回もセーフティの調節をしていない。兼用靴を原田（A）からもらったときも再調整していない。当然ゴムは劣化していたと思われる。現に登山中も前のスプリングがキーキーと鳴っていた。松丸秀夫氏によると、調節の基本は脛骨の太さ、年齢、スキーの技量、靴の大きさであり、これらが解放機構の摩擦にきいてくるので、長く放置しておくと解放しない恐れがある、ビンディングの寿命は三年と考えるのが適当であろう、とある。（この資料は高尾が送ってきてくれたコピーによる）。購入してから長い間、調節もしなくて放置しておいた私の責任は明らかである。

六　反省

山でスキー骨折したら遭難につながり、如何に多くの人に迷惑をかけるか、という認識が欠如していた。自分は足の骨を折るようなドジなことはしないという、おごりもあった。これは前述したように、山に対する緊張感の欠如である。今回、山も昔から慣れ親しんだところであり、道具に至っては全く考慮しなかった。年をとり山を安易に考えていた証拠である。高い授業料ではあったが、今後の警鐘としたい。

ここで日本山岳会の推奨する山岳保険についてのべておく。私はカテゴリーB1というのに加入している。この保険は遭難救助にかかる救助隊の費用を補償するもので、遭難者のそれではない。私は多分に誤解していた。今回わかったことは、同じパーティの人は救助隊でないので、原則として同行者の荷物の紛失、損傷、日当などの費用は出ない、直江津の病院での治療費は出ない、直江津から京都までのタクシー代は出ない、ヘリ代だけは出る、というのである。ただ今回はヘリは県警がとばしてくれたので費用は不要ということであった。いろいろと納得のいかない面もあるが、保険会社からの説明ではそういうことである。

終わりにお世話になった新潟県警航空隊救助隊員、芝田、高尾両氏などに感謝する。

（六ヶ月経過後まだ少々びっこであり、走れないが歩行には障害がない。でも登山はまだ無理である）

明永氷河における収容作業について

五月末から七月初旬にかけて写真家修業中の会員小林尚礼君が個人的に徳欽県へ撮影旅行に行きましたので、彼に現場の偵察と徳欽の体育運動委員会、および明永村村長との協議を依頼しました。

六月二四日に、明永村村長と小林の二人が一日かけて明永氷河の捜索を行いました。氷河上の様子はなだれのあとのデブリと呼ばれる残雪などが比較的多く、発見物は少なかったですが、身元の判別できない細かな遺骨や、テント・ヤッケ・帽子などの残骸のような遺品を、大きな袋に二つ程度の量を収容しました。身元の分かるものがありませんでしたので、そのまま荼毘に付しました。

発見場所は昨年より更に二百から三百メートル下流側の範囲で、その下端は下流側に続くセラック帯と呼んでいる氷河の崩壊した急傾斜帯に接しています。これは過去二年間の収容位置の動きから予想された場所であり、このセラック帯は危険で発見・接近が不可能になりますから、今年が氷河からの収容が可能な最後の年である可能性を物語っています。

小林君は七月初旬に日本へ帰国し、以上のような報告をしました。彼は現地での明永村や徳欽県関係者との協議、また会員の中川潔さんと昆明市の雲南省体育運動委員会の張俊氏との協議を重ねて、この後の計画は以下の

通りとすることを要請し、受諾の返事を現地の方から得ました。

基本的には、現地の方が三年目に入ってパトロールの要領を把握したので、彼らに任せることができる状況となりました。したがって昨年のように日本人が常駐する体制はやめて、現地の人たちによる定期的なパトロールで発見に努めることとしました。

今後とも会員の皆さまのご協力をお願いいたします。

文責：吹田啓一郎　（七月二十六日受理）

映像資料の調査のお願い

平井一正

来年はAACK創立七〇周年に当たります。AACK五〇周年のときは会の歴史をまとめ、「ヒマラヤへの道」として出版されましたが、これは日本の山岳史の資料として高い評価を得ています。七〇周年の記念行事のひとつとして、会の歴史を映像関係としてまとめてはどうかという計画があり、現在映像関係の資料の調査と収集に当たっています。しかし白頭山遠征など歴史的に価値のあるフィルムが現在行方不明のように、関係者が物故されたためにその所在が不明のものが多く、紙上をおかりして調査のご協力をお願いする次第です。

現在判明しているものは下記の表のようですが、？マークにお心当たりの人はぜひ私までにご連絡いただければ幸いです。特にオリジナルをお持ちの方、またこのほかの映像資料にお心当たりがある方はぜひ当方までご連絡ください。ここに聞いたら分かるかも知れないというあいまいな情報でも結構です。

調査、収集が終わりましたら、費用の関係もありますが、希望としてはそれを一本のビデオにまとめたいと思います。

オリジナル	ビデオ	問い合わせ済み関係者	
白頭山'34	？	梅棹、西堀、藤木、	
カラフト'40	？	梅棹	
知床'52	？	伊藤息女	
アンナプルナ'53	？	平井他　今西芳子	
カラコラム'55	京大？	？	
チョゴリザ'58	AACK	平井他	
ノシャック'60	岩坪	平井他	
サルトロカンリ'62	平井	平井他	
ガネッシュ'64	？	木村　樋口美和子	
ヤルンカン'73	？	上田　田附宏子	
カンペンチン'82		斉藤清明	
ナムナニ'85	？	伊藤宏範他	
マサコン'85	？	同上	
コンロン'88	？	同上	
雲南学術'89	？	平井（栗田隊）	

（連絡先：平井一正　住所、電話、ファックス、メイルなど名簿の通り）

会長より

上尾　庄一郎

今西錦司、西堀栄三郎、桑原武夫の三先生の肖像スケッチ画

先日（六月二五日、日曜日）に竹内ピラ氏を見舞いに、新河端病院を訪ねましたら、ピラの特別診察に斎藤Y院長がこられたのにお会いしました。そのときかって「岳人」に連載していた著名登山家の肖像スケッチ画の内、今西錦司、西堀栄三郎、桑原武夫の三先生方のオリジナルを京大の山岳関係者に寄贈したいと作者の牧　潤一画伯から申し出があり、Y病院の院長室にすでに来ているとのことでした。

早速拝見しまして、これはAACKニュースレターに掲載し、またホームページにも載せるべきと思いました。Yさんの依頼でAACK会長として礼状を書きましたがその中で上記の件についてお願いいたしましたところ、「日本山岳会、日本山岳画協会会員牧　潤一画、岳人　一九八一年　岳人スケッチ帖より」とのクレジットをつける条件で了解いただきました。もし賛同いただければ掲載をお願いいたします。なおY氏のもとにはスケッチ当日のエピソードの記録もあるようです。画はいずれは京大博物館の登山探検コーナーに展示あるいは保管されることになりましょう。

（七月三日受理）

AACKへの電話連絡

文献センター建物の解体に伴う物品の学内引越作業は、五月二五日に全て完了しました。

五月三〇日にNTTの電話回線の撤去工事をして、引き払い作業は完了です。

マー坊さんの部屋へAACK名義の電話を新設してこれを771-2500とすることを計画中で、関係方面へ問い合わせ中です。

771-4410は廃止の方向で考えています。

事務局

大倉山頂上にて

転居

上石見の大倉山に登りました。

デルファー高村

最長老安藤元雄さんを頭にY、エト、トッキュウさん、寺本正チャン、オシメさん、奥村・新井夫妻、川崎アワモリ、ゴジラ、パイ、オレッチそして小生。わたくしたちが最年少！ただし両夫人は除く。一九九九年一〇月三日、西麓の原町にある、井上靖記念館で雨宿りののち、東に廻って、まだ若い杉植林の中の踏み跡を急登し尾根にでてからは、ときおり鉈でブッシュをはらいながら、ガスのなか頂上二等三角点（千百十二メートル）につきました。

奥村兄の事前踏査のおかげです。かって一九八三年、今西先生らと試みたのは北面からですが、Yさん曰く、これで今西さんもおよろこびでしょう！先生からもういちどぜひ行こう、といわれていた宿題をはたして、みなさんとこころからヤッホーを捧げました。前日は大倉山東に位置する花見山（二等三角点千百八十八メートル）を足慣らしに登りました。ただし九百メートルあたりまで車で登れるスキー場上部の山です。いずれも山容はゆったりとしていい山です。

なお宿舎は岡山組がアレンジしてくれた新見千屋温泉いぶきの里、気分のよい山間のあたらしい宿です。つぎは正チャンが停年予定の再来年にまた中国山地でということになっています。若いメンバーのかたがたにも参加呼びかけます。六五歳の小生が最年少では心もとないことです。

理事会決議録

一．日時　平成十二年五月二一日

自午後一時三〇分　至午後三時

二．場所　京都市左京区田中河原町
　京大会館
三．出席理事
　上尾庄一郎　田中二郎　原田道雄
　岩瀬時郎　西山孝　吹田啓一郎
　竹田晋也　山田和人　（8名）
　委任状によるもの
　新井浩　横山宏太郎　松沢哲郎
　松林公蔵　清水浩　（5名）
　欠席理事
　上田豊　牛田一成　（2名）
四．議事の経過および結果
　会長 上尾庄一郎が議長となって「本日の出席者は定款第二一条第一項に示す定足数に達しているので正式に議事に入る」旨発言があり、議事に入った。
　第一号議案　平成十一年度事業報告および収支決算について
あらかじめ担当者のもとで作成された平成十一年度事業報告および収支決算について逐一審議し、事業報告および収支決算の通り満場一致で承認した。
　第二号議案　新入会員について
担当者より下記二名の本会入会申請者の紹介があり、満場一致で承認した。
　古瀬駿介　清水節郎
　議長から「本日の社団法人京都大学学士山岳会理事会の議事は以上をもって終了したので議事の経過は議事録にまとめ、その末尾に議長ならびに理事二名が署名捺印すること」として閉会を宣言した。

総会決議録

一．日時　平成十二年五月二一日
　自午後三時三十分　至午後六時
二．場所　京都市左京区田中河原町
　京大会館
三．出席者　三五名
　委任状による出席者数　一四五名
　欠席者数　一一八名
四．議事の経過および結果
　会長上尾庄一郎が議長となって「本日の出席者数は定款第二七条に示す定足数に達しているので正式に議事に入る」旨発言があり、議事に入った。
　第一号議案　平成十一年度事業報告および収支決算について
　同日先に行われた理事会において承認を得た平成十一年度事業報告および収支決算について担当者より説明があり、満場一致で承認した。
　第二号議案　平成十二年度事業計画および収支予算について
　平成十二年三月二六日開催の理事会において承認された平成十二年度事業計画および収支予算について担当者より説明があり、満場一致で承認した。
　第三号議案　副会長について
　平成十二年三月二六日開催の理事会において承認された、理事岩瀬時郎の副会長就任について会長上尾庄一郎より説明があり、満場一致で承認した。
　第四号議案　新入会員について
　同日先に行われた理事会において承認された下記二名の本会入会申請者の紹介があり、満場一致で承認した。
　古瀬　駿介　清水　節郎
　議長より「本日の社団法人京都大学学士山岳会総会の議事は以上をもって終了したので議事の経過および結果を会員に通知するとともに議事録にまとめ、その末尾に議長ならびに出者二名が署名捺印すること」として閉会を宣言した。

追悼　林一彦

お別れの言葉

斉藤　惇生

　京都大学学士山岳会の山仲間が、敬慕してやまなかった林一彦先輩が、医師として冷静にまた敢然として闘ってこられた悪性の肝疾患のため、ついに三月十九日世を逝ってしまわれました。
　悲しい知らせのファクスを見た時、胸にも頭にも同時におおきな空洞ができたようになり、むなしさで呆然と立ちつくしてしまいました。林先輩から直接山で薫陶を受けた私と同世代の者は、みな同じ思いをしたに違いありません。

林先輩は旧制富山高校から京大医学部へ進まれました。その間山岳部で活躍、主に剣、立山連邦を活動の場とし、登山家として山に対する心と技術を磨かれました。第二次大戦終了後、京大山岳部が再建の一歩を踏み出した時、昭和二十五年夏に剣の真砂沢を基地にして始めての合宿がありました。医師になられたばかりだった林先輩は、総合コーチとして一緒に入山されました。藤橋から歩き始め称名の急坂を登り弥陀ヶ原を越える入山は、炎天下四十キロのザックを背負っての難行・苦行でした。休憩の声にそれとばかり肩にくいこむザックを下ろすと、林先輩の怒声がひびきました。「ザックは下ろさず担いだまま休め」。これにはみな驚いたのですが、仕方なくまた担ぎ、腰をくの字にして重さに耐えて休んだのでした。これは立山の荷揚げ人夫、ボッカの人たちが休憩の時決して荷を下ろさずに休む方法を取り入れられたと後で知りました。

剣の岩場での岩登り、雪渓の登り降りの技術など、一歩誤ると生命に係わるので、きびしい訓練が林先輩の指導のもとに続きました。一度急峻な雪渓で林先輩がグリセードの模範を実演された時、きびしい顔をいっそうきびしくして、雪を舞いあげての華麗な滑りに、我々新人は、口を開けて見とれるだけでした。夕食後反省会が終わると、大テントの中か、外でキャンプファイアーを囲んで、山の歌、民謡、旧制高校の寮歌の合唱が谷間にひびきこだましました。この楽しさで昼間の辛苦は吹き飛んでしまいました。

この合宿に参加したもののなかから、京大学士山学会のヒマラヤ遠征の主力メンバーが輩出しました。剣合宿の二年後の昭和二十七年、林先輩は京大の先輩今西錦司先生を隊長とする日本山岳会のマナスル偵察隊に医師として参加されました。ヒマラヤなど夢の夢であった私たちは、帰国されてからの林先輩のネパールやヒマラヤの話に血湧き肉踊る思いをしたのでした。

京大学士山岳会は一九五八年カラコルム山脈のチョゴリザ峰、一九六〇年にヒンズークシ山脈のノシャック峰に初登頂し、意気盛んでした。一九六二年には続いて宿願のカラコルム山脈のサルトロ・カンリ峰（七七四二メートル）に遠征隊を派遣しました。パキスタンとの合同隊で、総隊長は四手井綱彦教授で林先輩は第一線の登攀隊長を引き受け、私たちを指揮されました。最終登頂隊員にパキスタンのラジャ・バシールと高村泰雄そして私が選ばれました。林先輩は若手の谷泰、上尾庄一郎隊員とともに最終キャンプ（七〇〇〇メートル）まで深い雪をラッセルしてサポートされました。テントを張り終えると林先輩は私たちに「これから以上はお前たちの力で登るんだ、寝坊するなよ」と励ましの言葉をかけて、もう薄暗くなったなかを下のキャンプへ下りて行かれました。翌朝出発。雪が深くその日は雪の中で露営し、夜中三時月下のもとに出発し七月二十四日十時三十分頂上に立つことができました。開発されたばかりの小型トランシーバーで頂上からの報告がやっと下部キャンプにキャッチされました。林先輩は「よかった、よかったなー」と横にいた岩坪五郎隊員に抱きつかれたそうです。いつもきびしい顔の林先輩の目に涙が出ているのを見て、岩坪はどう答えてよいか一瞬とまどってしまった、と述懐しています。

サルトロ・カンリ遠征の後、林先輩はアメリカに留学され、そして父上が待っておられた林病院へ帰られました。お父上は林先輩の研究を指導された青柳教授や鈴江教授に何度も、山をやめるように言ってくれと直訴されたと聞いています。

一九八五年には中国と同志社・京大が合同したチベット奥のナムナニ峰登山隊の出迎えに元老として新彊へ、一九九〇年には京大医学学術登山隊の顧問としてチベットのシシャパンマ峰のベースキャンプまで来られ、中国奥地の旅をたいへん元気に楽しんでおられました。

林先輩にはたいへんな泣きどころがありました。それは一人娘のはるみさんです。そのはるみさんも、もうお子さんが二人あり、ご主人の秀樹先生と力を併せ、林病院をきっとしっかり守り発展させていかれることでしょう。林先輩は曲がったことが大嫌いで、自分にもきびしく、また我々もそれを求められました。人に親切で面倒見が

よく、世話になったものも多いのです。天台の開祖最澄は「忘己利他」己を捨てて人のためにつくす精神を説きました。林先輩は医業において、山においてそれを実践された人でないかと思います。

京大山岳部は昭和初期に建設されたヒュッテを妙高高原の笹ヶ峰に持っています。老巧化がひどく、昨年O.B.が募金してそのヒュッテを全面改築しました。林先輩は多額のご寄付をされたのですが、新しくなったヒュッテの写真を見てはるみさんに、暖かくなったら行こうと言っておられたそうです。実現せぬうちに遠くへ行ってしまわれました。真に残念です。思いではまだまだありますが、林先輩がもうそこらあたりでいいぞ、とおっしゃっているような気もいたします。心からご冥福を祈って、お別れの言葉を終わります。

（告別式での弔辞より）

編集記

AACKは誰のものか

先回の総会に出席しました。今回の総会はこのニュースレターの編集を担当して初めてのものですから、取材を兼ねての出席でした。事務局の発表では出席者は三五名ですが、会場は満席に近いような雰囲気に加え、二名の新人会員の参加もあり、盛会でした。残念ながら懇親会には出席できませんでした、多分にぎわったことと思います。

しかし事務局の提出する事業計画は、旧態依然と言っても過言ではないようなもの、具体的な活動のイメージが浮かんでこないものでした。伝統ある組織の宿命として、旧態依然とならざるをえないのでしょうか。

事務局の説明によれば、財団法人として文部省へ提出するには、形式を整える必要があるとのこと。どうやらこの事業計画は文部省のためのものであり、会員のために作られたものではないらし。

会の目的には、登山と探検の振興、山岳研究の普及、会員相互の連絡研修などが列挙されており、会員がこの目的の達成に参加できるような事業計画を期待したいのです。

最近身近に起こった事故から、われわれの行動には常に危険がつきまとっていることを改めて実感しました。今回はその様な危険についての報告が含まれています。中島氏によるシリーズが、そのような危険に対処するための指針をわれられに与えてくれるものと期待しています。今夏も熱帯並の暑さです、くれぐれもご自愛ください。

沖津　文雄

関係団体行事カレンダー
（2000年ー2001年）

8月 3日～ 5日	関東グループ登山、笹ヶ峰ヒュッテにて
8月 5日～20日	笹ヶ峰ヒュッテ夏の一般開放予定（予）
10月 7日～15日	笹ヶ峰ヒュッテ秋の一般開放予定（予）
12月25日～1月2日	山岳部スキー合宿、笹ヶ峰（予）

編集委員　沖津文雄、吹田啓一郎、竹田晋也
発行日　二〇〇〇年八月八日
発行所　京都大学学士山岳会
京都市左京区吉田本町
京都大学工学部建築系
吹田啓一郎　気付
製　作　京都市北区小山西花池町一―八
（株）土倉事務所